



Title	われわれの死後の姿とは：原隆仁監督「お墓がない！」を観る
Author(s)	鷲田，清一
Citation	臨床哲学ニューズレター．1998，2，p. 101-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81750
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

われわれの死後の姿とは

——原隆仁監督『お墓がない!』を観る

驚田清一

お墓というのは、いまここに存在しないもの、つまりじぶんの死後への想像力によって支えられている。じぶんは死んだ後どこへ行くのか、じぶんの思い出はどういうかたちでこの世に残るのか。

まだ起こっていない事態に向けられるそういう痛々しい不安や傲慢ともいえる思いが目に見えるかたちをとったのが、葬儀であり墓であるから、それをテーマにした物語がおもしろくないわけがない。伊丹十三監督の『お葬式』もそうだったが、原隆仁監督のこの映画『お墓がない!』も、人が死を前にしてなす大騒動を切なくかつコミカルに描いていて、なかなか楽しませる。ある時期から「美人女優」の枠を大きく踏み越えてしまった岩下志麻も、喜劇へのはじめての挑戦で、なかなか好演している。

「先生、女優の私をだますことはできませんわ」。病院で検診を受けた大女優、桜咲節子は医師の診断を「癌」と早とちりする。いったん思い込んだらもう修正しようがなく、不二の大女優としてのじぶんのイメージを一つたりとも傷つけることなく死ぬことに、残りの命を賭ける。

最初の仕事は、じぶんに相応しいお墓を探すことだった。というのも、孤児として育てられた節子には先祖代々の墓などあろうはずもなかったからである。「死ぬほどお墓が欲しいのよ」。出生の秘密を隠しとおすために、ひそかに格別に立派な墓を建立しようとする。その間に、遺作となるはずの撮影中の映画（癌を宣告された少女の母親の役）を完成させること。これがもう一つの仕事で、劇中劇として進行する。

身よりのないこの女優にかぎらず、現代では多くの人がじぶんの遺骨はどうなるのかと、心のどこかで心配している。子どもがいようがいまいが、老後は夫婦二人だけで生き、最後に残ったものが一人で生きる、そういう人生の形式が一般的となってきた。それに非婚の女性、離婚した女性、そして夫の家の墓に入りたいくない女性など、女性にはことさら自己の死のあり方をめぐる不安がつきまとう。墓は「家」という枠組を引きずってきたからである。

帰るべき家をもった「本仏」に対して、帰るべき家のない霊、供養する縁故者のない霊を「無縁仏」というが、そういう意味では、死後、じぶんの遺骨が無縁化し、遺棄されるのではという不安は、今日のとくに都市生活者には一般的である。

そこで、個人の墓とか夫婦の墓、さらには一人っ子どうしのペアのための両家の墓、有志でつくる共同納骨堂など、「先祖代々の墓」に代わるさまざまな埋葬の形態が考えだされつつある。

しかし、である。「家」という共同体の単位が緩んできたとき、ひとは「家」という枠から解放されはしたが、それと同時に、ある場所に住むこと、ある場所に葬られることの根拠も失ってしまった。だから頭のなかでどんな墓を設計しても、どこか空々しさ、虚しさが残る。かと言って、死ねば死にきりというイメージにも耐えづらいところがある。

この映画にも出てくる、撒骨（さんこつ）という方式——骨を蒔いて土や海に戻す——は、そういう意味では、墓という固定された場所にこだわらない。墓を否定する思想だと言ってもいいし、「地球がわたしの墓」という思想だと言ってもいい。

鳥葬という習慣がチベットにあるが、これは地上そのものから死者を切り離す。死者の痕跡をこの世からいっさい無くすために、遺体を砕き、ていねいに切り裂いて、はげ鷲の食に供する。はげ鷲は腹におさめた肉とともに死者の魂を空高く天国にまで運んでくれるというわけだ。すごい想像力だと思う。地球を回るロケットから遺灰を蒔いて大気圏で燃え尽きさせる宇宙葬も、これと近い発想かもしれない。

こんな発想もある。大阪市天王寺区にある一心寺では、十年ごとに、納骨された二十万體という遺骨を砕いて粉にし、それをセメント粉とともに練り合わせて仏像にする。一心というより、一身体。 「骨仏」は死者たちの究極のコミュニティだ。

人がそれぞれに十分納得し、これならと気持ちをおさめることのできる死後の姿とはどういうものか。わたしたちはそれをもう一度、ファンタジーやライマジンেশョンを駆使して設計しなおす時期に来ているらしい。形を残さないという選択肢もふくめて。

（『産経新聞』1998年3月2日）